説教要旨「神になれなかった王様」

使徒言行録　１２章　１８～２４節

ヘロデはユダヤ人への迎合政策として、ヤコブを殺害し、それがユダヤ人に喜ばれるのを見て、今度はペトロを捕らえ、殺害しようとました。また、主の天使によってペトロが牢からいなくなると、番兵たちを処刑してしまいます。ヘロデは怒りのゆえに、シドンとティルスに食料を提供することを止め、その住民を飢餓に追い込むこともできたわけです。そのような意味で、ヘロデはまさに神のように振る舞ってい、人の命を握っている神のように自分を考えていたのです。そのようなヘロデが、人々の「神の声だ。人間の声ではない」と叫びを否定せず、むしろそれを受け入れてしまったのは当然のことであったと言えるでしょう。しかし、自らを神であるかのように振る舞い、人々にそうあがめさせたヘロデは、主の天使によって撃ち倒されたのでした。

この地上において王は最高権力者ですが、その王に権能を与えた存在＝神がおられることが聖書には記されています。人間の歴史において、指導者や国家そのものが神格化され、栄光化されることがしばしば起こりました。この日本においても、天皇を神としてきた歴史があります。力で押さえつけて、人々の心まで支配しようとする権力者は、いつの時代にあっても現れます。けれどもわたしたちたちは、御言葉を通して、自分の命を握っているように思えるほどの権力に対しても、決して神としてあがめるようなことをしてはならないと示されました。

宗教に対する悪意、敵意が渦巻いているように感じるこの日本の社会にあって、社会的にも、また信仰的にも弱いわたしたちです。けれども、弱いわたしたちだからこそ、すべてを主に委ねて祈ることが出来ます。祈ることしか出来ません。けれども祈ることだけは、わたしたちにも出来るのです。どれほど大きな悪意にさらされたとしても、どれほど強い敵意を向けられたとしても、この世界のすべてを、その御手の内に治めておられる、ただ一人の全能の神が味方となってくださいます。わたしたちの主なる神に信頼して、祈りを合わせて歩んでまいりましょう。

（２０２２・７・１７　説教者：稲垣真実）